

われよりほかに

谷崎潤一郎最後の十二年

伊吹和子

伊吹和子

われよりほかに

谷崎潤一郎最後の十二年





われよりほかに

谷崎潤一郎 最後の十二年

講談社

われよりほかに 谷崎潤一郎 最後の十二年

一九九四年二月一八日 第一刷発行

一九九四年六月七日 第五刷発行

著者——伊吹和子

© Kazuko Ibuki 1994, Printed in Japan



発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—三—三 郵便番号一三〇—

電話

文芸図書第一出版部(〇三)五三九五—三五〇四

書籍第一販売部(〇三)五三九五—三六二二

書籍製作部(〇三)五三九五—三六一五

印刷所——株式会社精興社 製本所——牧製本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部宛にお願いいたします。

目次

一の章 下鴨潺湲亭の頃 7

おめもじ／谷崎家の人々／潺湲亭のこと／口述はじまる／虫の居所／赤い帽子／夏の熱海へ／花散る里／くいしんぼう／半袖／ひぐらし／秋の潺湲亭／温泉のない家／冬のすだれ／第五福竜丸事件／灯籠流し／飛行機不時着／祇園一力の夜

二の章 『老後の春』の頃 89

宇治のものけ／「おさな源氏」／『過酸化マンガン水の夢』ならびに『鍵』の原稿について／けふかも霞む／『鴨東綺譚』始末／「矢筈弓子」について／「中断」の意味するもの／「綺譚」という題名について／河内天台院訪問記／闘鶏／『老後の春』／河内の小説／『残虐記』中断／碑

三の章 『夢の浮橋』前後 163

先生と秘書／『高血圧症の思ひ出』の筆記者／ラブレター／右手／『夢の浮橋』はじまる／「ねぬなは物語」／「ほとゝぎす」の色紙／五位庵／陰翳について／先生と口述筆記／京言葉の会話文／小説の出来るまで／落橋

四の章 伊豆山雪後庵にて 243

『伊豆山放談』／ボクという犬／ここに鐘は鳴る／来なかった地震／紅しだれ／雲南の胡桃／塩せんべい／足の裏／京都からの日記／助六／『三つの場合』／「阿部さんの場合」／「岡さんの場合」／「明さんの場合」

五の章 『瘋癲老人日記』前後 321

「週刊新潮揭示板」／「若き日の和辻哲郎」／『当世鹿もどき』／嶋中事件／続『武州公秘話』／『瘋癲老人日記』開始／消しゴム／『瘋癲老人日記』実見／拓本／モデルとしての「颯子」／光と影／「瘋癲老人」の手紙／法然院の墓／「瘋癲老人」と死

装幀 大泉 拓
装画 堀 文子
堀文子画文集「花」より
(JTB出版事業局刊)

六の章 『雪後庵夜話』 前後 389

「わが小説」／『台所太平記』再開／『台所太平記』の虚と実／『台所太平記』蛇足／その後の台所／『雪後庵夜話』／先生と批評／編集会議／『新々訳源氏物語』／湯河原湘碧山房

七の章 終焉まで 441

手術／「猫犬記」／女三宮と猫／先生と『源氏物語』／遺文／「天児闕伽子の小説」／「日記」と「創作メモ」／訣別の小説／七月二十九日／永訣

あとがき 512

略年表 516

参考・引用文献 528

系図 532

下鴨潺湲亭と伊豆山雪後庵の見取り図 533

われよりほかに

谷崎潤一郎 最後の十二年

我といふ人の心はたゞひとりわれより外に知る人はなし

『雪後庵夜話』

一の章

下鴨潺湲亭の頃

おめもじ

谷崎潤一郎先生に初めてお目にかかったのは、昭和二十八年五月十七日、京都下鴨の谷崎邸においてである。葵祭が終って賀茂の社の界限から喧噪が去り、ただす糺の森の木々の梢を渡る風が、きらきらと若葉をひるがえしている日曜日の午後であった。

その時先生は、数え年六十八歳。健康を害して、二十六年の五月以来、中央公論社から刊行が続いていた『潤一郎新譯源氏物語』全十二巻の、原稿執筆が行き悩んでいた。

先生の『源氏物語』の口語訳、いわゆる「谷崎源氏」には、周知の通り、その生涯に前後三回の訳がある。その経緯は先生自身も何度か書いておられるし、玉上琢彌先生が「大谷女子大國文」に発表された『谷崎源氏』をめぐる思い出」にも詳しいが、第一回目は、いうまでもなく、昭和十四年一月から十六年七月にかけて刊行された全二十六巻本『潤一郎譯源氏物語』である。しかし、この時は「分らずやの軍人共の忌避に触れないやうにするため」(『新譯序』、至るところで原作の筋を歪め、削除しなければならなかった。敗戦の後、ようやく言論表現の自由な時代が来て、削除のない完全な翻訳になったのが第二回目、二十六年五月か

ら刊行の『新譯』で（付け加えれば、三回目は、新仮名遣いを採用されるに当って手が加えられた『新々訳』であるが、これはずっと後のことになる）、先生は、その訳業のちょうど真ん中まで来て、高血圧症のために立ち往生し、原稿の口述筆記を中心とした秘書の役目をする人を、捜しておられたのであった。その頃の先生側の事情は、後に発表された『高血圧症の思ひ出』に、

「私はそれまで助手を使はず、単独で働いてゐたのであるが、眼が不自由になるにつれて、どうしても秘書を雇ふ必要を感じ、四五人の人を試みた後に、京都の古い呉服商で旧家の一人娘である伊吹和子氏に五月中旬から来て貰ふことにきめた。この人は京都大学に通ふかたはら、澤瀉博士の門に入つて万葉を研究してゐるので、源氏の翻訳の手伝ひをするには申し分がなかつた」

と、記されている。当時、それまで勤めていた女性が四月末に罷めて、代りを見つけるのに苦勞しておられたらしい。

私の生家は「旧家」といわれるほどではないが、戦前、少しは名の知れた繊維問屋であつた。ただし、「京都大学」云々以下には少々いきさつがある。

『新譯』の序には、第一回目の訳業の時より体力が衰えたことと、中央公論社からの要請で短時日のうちに刊行を終えたいということから、

「私は平素敬慕する新村出博士に相談し、博士の推輓に依つて、京大出の新進国学者玉上琢彌、榎克朗、宮地裕の三氏の協力を得ることになつたが、これには澤瀉久孝博士の蔭の斡旋などもあつたことゝ察せられる。三人もの人に頼んだのは、最初榎氏一人であつたのが、途中で同氏が病氣になつたので、次に宮地氏を頼み、更に玉上氏が加はることになつたのである」

とある。最初に谷崎先生から依頼を受けられた言語学の権威新村先生は、京都大学を退官してすでに十年ほど経ておられたので、新進気鋭の適任者をと澤瀉先生に相談され、澤瀉先生からさらに、当時国語学国文学

研究室を統轄しておられた玉上先生にお話があって、榎氏に白羽の矢が立ったということであった。榎氏は、すでに昭和二十三年九月頃から『少将滋幹の母』の資料調査を受持ち、週に二、三度、谷崎先生の許に通っておられたが、後に『谷崎潤一郎全集』月報26に寄せられた記事によると、『源氏物語』改訳の下準備は、夙に二十四年五月頃から始まっている。その後、榎氏が病氣療養のため入院され、再度玉上先生の推薦で宮地氏が谷崎邸に通われることになり、次いで玉上先生自身も参加されて、二十六年に入ると、準備はいよいよ具体化して進められることになった。『新譯序』には、続いて、「三氏の仕事は主として誤訳や脱漏や歪曲がありはしないかを旧訳本について吟味し、私に注意を与へること、及び系図、年立、梗概等を作成すること」であったと記されている。

前記玉上先生の『谷崎源氏』をめぐる思い出に、

「二十六年一月二十六日に谷崎さんと会い、旧訳本に意見を書きこんでお送りすることになった。五四帖を宮地君に何帖か、あとの方を分担して貰い、あとでわたしも見せて貰うことにしたが、わたしの引き受けた帖々は急を要するので、初めのほうの数冊を若い人に一人一冊ずつ持ってもらって、検討し書き入れをして貰い、あとでわたしが目を通すことにした」とある。

実は、私は二十五年から研究室で先生方の雑用を手伝っていて、偶然この下準備の仲間に入れて貰ったことが、谷崎先生に結びつく萌芽になったのである。右の文中には「一冊ずつ」とあるが、のちには宮地氏の分担された部分も、何冊か預かった記憶がある。そんなことから、当時研究室では、「谷崎源氏」の話題や先生の噂がよく持ち出されていたので、谷崎先生に対しても、いつの間にか何となく身近な、馴染み深い存在のような錯覚を持っていた。その先生が、旧仮名遣いの書ける秘書を捜しておられる、仕事の内容は、主として『新譯源氏』の原稿の口述筆記なのだが、行ってみないと、私におはちがまわって来た時、ふと、ま

んざら知らない仲ではないという気がして、「源氏の筆記の間だけなら」と、ごく軽い気持で谷崎邸を訪ねたというのが、私の側の「いきさつ」である。お目にかかつてすぐ、研究室のことを申し上げたら、先生は、「ほう、そりゃ都合がいいや」とおっしゃった。

付け加えれば、『高血圧症の思ひ出』にある「澤瀉博士の」云々というのは、二十六年春に澤瀉久孝先生が京大を退官されて大学に『万葉集』の講座がなくなり、それを補うために、毎日曜日の午前中、先生の御自宅で輪講会が催されていて、誘われるままに私も参加していたというに過ぎない。谷崎先生にお目見えした五月十七日は日曜日で、その午前中も輪講会に出ていたために、谷崎邸への参上の時刻をずらして頂いた記憶がある。そして、その理由を説明したことなどから、「万葉を研究してゐるので」ということにもなったのであろう。後刻、澤瀉先生に報告に伺ったら、

「へええ、あんたが谷崎さんに及第しましたか」

と、ちよつとびっくりなさったようであった。それまでの私をよくご存じであった澤瀉先生には、この世間知らずの娘が果して勤まるのかと、危惧される気持が強かったのであろう。ところが、軽い気持で谷崎邸の門をくぐった、その春二十四歳になったばかりのこの「呉服商の一人娘」は、思いがけずこれがきっかけとなってやがて中央公論社に入り、初対面の翌日から、逝去までの十二年間を、一時期（後述）を除いてほとんど毎日、先生の仕事に関わることになった。先生の方も、まさか、こんなに永くなるとは思っておられなかったであろうが、その日常は、逝去がもっと遅ければ、それだけ長く続いたのではなからうか。余談ながら私は結局、五十五歳の春に定年退職するまでの歳月を、編集者として過すはめになったが、あの糺の森の若葉が光っていた日曜の午後、谷崎先生とのその後の日々はもちろん、まして後年、澤瀉先生の大著『萬葉集注釋』全二十巻をも中央公論社で担当することになるなどと、どうして予測し得たであろう。『源氏物語』ふ

うにいえば、前の世のちぎりや深かりけむ、ということか。

その後研究室の先生方も大成され、玉上琢彌先生は大阪女子大学、榎克朗氏は大阪教育大学、宮地裕氏は大阪大学教授を経て、現在、それぞれの名誉教授となっておられる。

この小著は、その十二年間の思い出の片鱗を、時を追いつつ綴ったものである。一介の編集者としてかいまみた、谷崎先生の素顔のスケッチに過ぎないが、すべて、私の直接の体験の記録である。

なお、文中に引用、あるいは言及した書籍の刊行日、諸論文の発表誌等の詳細については、巻末にまとめて掲載させて頂いた。谷崎作品は中央公論社刊行の昭和四十一年～四十五年版『谷崎潤一郎全集』全二十四巻に拠り、引用に際しては、仮名遣いは原文に従ったが、漢字の表記は、特別な固有名詞を除き、常用漢字に改めた。

谷崎家の人々

最初に、私が順次お目にかかることになった谷崎先生のご家族について、略記しておきたい。この家族構成は複雑で、当初から、私なりに理解につとめた経緯がある。

先生は、大正四年、数え年三十歳で結婚された最初の相手、千代夫人との間に、結婚の翌年、長女の鮎子^{あゆ}さんを儲け、大正十二年の関東大震災まで、東京近辺に住んでおられた。震災を機に関西に転居し、阪神間が常住の地となっていた大正十五年暮（本書「略年表」参照）、先生と根津松子夫人との運命的な出会いがあった。当時、松子夫人には、大阪の豪商（綿布問屋）の若主人であった夫君の根津清太郎氏との間に長男清治さんがあり、昭和四年、長女の恵美子さんが生れておられる。松子夫人には、既に婿養子（詮三氏）と結婚して生家の森田家を立てておられた姉君朝子夫人^{あき}のほかに、重子^{しげ}さん、信子^{のぶ}さんの二人の令妹があり、令妹たちは長姉朝子夫妻の許よりも、次姉のおられる根津家で暮されることが多かった。

一方、先生は昭和五年八月、千代夫人と離婚、翌六年春、古川丁未子氏と再婚しておられる。しかし、丁未子夫人とは翌年の十二月に早々と別居、松子夫人との交際が進んで、九年、丁未子夫人と離婚の手続が完了、松子夫人も根津氏との離婚が成立し、昭和十年、先生には三度目、松子夫人には二度目の結婚式があげられた。二人の令妹と清治さん、恵美子さんは、ともに先生が引き取られた。この松子夫人との結婚のいきさつは、昭和三十八年になって、随筆『雪後庵夜話』に詳細に明らかにされている。

昭和十年頃から十六年に至る、松子夫人を中心とした四人姉妹の生活が『細雪』の母胎となっていることはいうまでもない。昭和十六年三月、末妹信子さんが嶋川信一氏と結婚、続いて四月、次妹重子さんが渡辺明氏と結婚されたが、その明氏は二十四年秋に逝去された。後年の随筆『三つの場合』に、

「当時四十三歳に達してゐた彼女は、（中略）姉の先夫の長男根津清治を養子に迎へ、その配偶者に京都の高折病院長高折隆一氏の長女千萬子（橋本関雪孫娘）を養女に娶つた」

とあり、さらに、

「一年程して若夫婦の間には私が『たをり』と命名した、非常に愛らしい素晴らしい女子が生れた」とある。

恵美子さんは昭和二十二年に先生の次女として谷崎家に入籍、三十五年、観世栄夫氏と結婚して、一男一女を挙げておられる。

付記すれば、千代夫人は佐藤春夫先生と再婚して、鮎子さんとともに佐藤家に移られた。その鮎子さんは昭和十四年、佐藤先生の甥の竹田龍児氏と結婚して、一男二女を儲けておられる。

以上が、私の接した晩年十二年間の谷崎先生に直接関わりのあった、ご家族の略記である。